
研究ノート

日本語教師のビリーフに関する研究の問題点

——中国における日本語教育を改善するために——

周 天 舒

1. はじめに

本研究は、中国における日本語教育を改善するという目的の下で、日本語教師を対象とする先行研究と日本語教師のビリーフに関する先行研究を概観することによって、日本語教師のビリーフ研究の問題点と今後の動向について述べるものである。はじめに、本研究の背景を述べる。

国際交流基金（2021）の調査によると、2021年の時点で、東アジアにおける日本語教師数は前年より4.1%下回り、39002人であった。その内、中国人教師は21361人で、全体の約54%を占めていることがわかった。つまり、東アジアにおける日本語教師の半数以上が中国人なのである。また、国際交流基金（2020）の調査によると、中国における日本語学習者数の内訳は、高等教育では575445人で、57.3%を占めていることがわかった。つまり、中国においては、高等教育で日本語を学習する人が多数派なのである。

このように、中国は数多くの日本語学習者と日本語教師を擁するものの、日本語教師の資格については、整備されているとはいえない。なぜなら、中国における日本語教育機関は、私立といい、公立といい、小中学校から大学まで幅広いが、中国教育考试网（2023）によると、高校で教える教師にしか、日本語教師の資格は与えられていないからである。つまり、中国における日本語教師の資格制度は、幅広い日本語教育機関があるという現状に対応できていないといえよう。

さらに、中国教育考试网（2023）という日本語教師資格試験の試験内容を見てみると、「総合的素質」と「教育知識と能力」という2つの科目しかない。しかし、この2つの科目はすべて的高校教員試験の中で行われる共通科目となっている。このことから、高校での日本語教師は、資格試験があるにもかかわらず、日本語教育と関連する科目が1つもなく、専門性が低いといえる。つまり、中国における日本語教育の非常に大きな問題点としては、日本語教師の資格試験がまだ体系化されておらず、幅広い年齢層にわたる教育機関に対応するのが困難である

ということである。

一方、中国における日本語教師の雇用の現状については、日本語教育専攻の出身者に限らず、日本語専攻の出身者であれば雇用されるという基準になっている。そのような現状に至った原因として、中国の高等教育機関において、日本語教育分野を設立している大学が多くないことが挙げられる。また、筆者が勤務する大学の日本語教師の出身を見る限り、日本に留学した経験がある教員は多いが、専門とする分野はそれぞれ異なっており、日本語教育専攻の出身はほかの専攻と比べ、まだ少ないといえる。しかしながら、日本語能力の高い者が優れた日本語教師とは限らない。日本語教師であっても、日本語教育に関する知識を身につけていなければ、専門性は低いと考えられるであろう。

このように、中国における日本語教育の現状として、資格試験が体系化されておらず、教師の専門性が低いという問題点があり、それを解決するためには、中国において、日本語教師の専門性をさらに高め、日本語教師を育成する体系を整える必要があるといえよう。

2. 問題提起

1で述べた現状から、今後、中国の日本語教育において、専門性の高い日本語教師の育成が重要になると予想される。しかしながら、教師研修が限られた時間で行われている以上、日本語教師の専門性が育てられるとは考えられない。そこで、日本語教師に自己研修について理解させ、自己研修を行う意識を育成する必要があると考える。

さらに、中国に於ける日本語教師の専門性の低さを今後改善していくために、まずは日本語教師を対象とした研究が有用な手掛かりとなることが考えられる。そこで、前節で述べた自己研修を行うとき、教師自身のビリーフが大きく影響すると予想できることから、中国人日本語教師のビリーフを研究する必要があると思われる。しかしながら、中国人日本語教師を対象とするビリーフ研究はまだ少なく、今後、より多くの研究が必要とされるであろう。

本研究では、こうした問題意識のもとに、中国において、日本語教師の専門性を高めるために必要なものとして、日本語教師のビリーフに関する研究がどのように行われてきたか概観し、そこでの課題を明らかにする。なお、本研究においては、岡崎（1999, p.147）に倣い、ビリーフを「言語学習の方法・効果などについて人々が自覚的あるいは無自覚的もっている信念や確信」と定義する。

3. 日本語教師を対象とする研究

本節では、日本語教師を対象とする研究を概観し、問題点について述べる。「日本語教師」というキーワードを用い、学術論文をキーワード検索し、得られた論文や研究ノートなどを概観してみると、日本語教師を対象とする研究は、概ね教師研修、キャリア、アイデンティティ、資質、実践、ビリーフという6つの視座から捉えられる。

3. 1 教師研修から捉える研究

まずは、教師研修に関する研究である。代表的なものとして中西・井本（2021）、深澤ほか（2022）がある。

中西・井本（2021）は、ネイティブ日本語教師を対象としたオンライン日本語教師養成講座で、反転授業を用いる有効性を明らかにするために、アンケート調査を行った。その結果、文法の大切さがわかったというような気づきが挙げられた。

また、深澤ほか（2022）は、教師研修の新たな形として、オンライン研修を活用する可能性を探り、研修項目に関するニーズを明らかにするために、3カ国のネイティブ日本語教師を対象としたアンケート調査を行った。その結果、教授法やコースデザインについての研修のニーズが高いということが示された。

以上に挙げた研究のほかに、池田・酒井（2019）、佐藤・高木（2009）などがある。教師研修に関する研究では、教師研修のコースデザインの有効性の検証や新たな研修スタイルを見出す可能性を探るといったような研究が多いといえる。

3. 2 キャリアから捉える研究

次は、日本語教師のキャリアに関する研究である。代表的なものとして清水・小林（2009）、施（2018）がある。

清水・小林（2009）は、すでに日本語教師を辞めた元日本語教師を対象とし、教師を辞めた理由や原因などを探った。その結果、外側からの影響が原因であることが多く見られ、仕事に復帰したいと思っている対象者も多いということがわかった。

また、施（2018）は、中国における日中両国の政治的関係の変容を振り返り、中国における日本語教育に関する政策と日本人教師に対する受け入れ政策が、経済や政治によって影響を受けてきたことを明らかにし未来を展望している。

以上に挙げた研究から見ると、日本語教師のキャリアを視座として行った研究は、主に個人の面と政策や歴史の面から捉えているといえる。個人の面では、主に日本語教師の個人のキャリアを明らかにし、形成過程と影響要因を探っている（ほかに奥田，2011；尾沼・加藤，2021；加藤，2016；佐藤ほか，2022；若杉，2019など）。一方、政策や歴史の面では、主に日本語教師に関する政策の歴史を振り返り、政策の転換や未来への展望などについて提言している（ほかに篠崎，2019など）。

3. 3 アイデンティティから捉える研究

3つ目は日本語教師のアイデンティティに関する研究であり、代表的なものとして飯野（2012）、北出ほか（2013）などがある。

飯野（2012）は、従来の日本語教師の成長に関する研究を概観し、実践共同体間の移動から教師の成長を捉え、活動理論と正統的周辺参加理論を用い、教師のアイデンティティの変容を明らかにし、日本語教師の成長に対して再概念化を行っている。

また、北出ほか（2013）は、日本語教師のアイデンティティの成長を明らかにするために、社会文化的側面からアイデンティティを捉え、現職教師、実習生、教師準備のプログラム生を対象とし、事例研究を行い、成長プロセス、きっかけ、クリティカルな点について提示し、教師の成長に関して提言している。

日本語教師のアイデンティティに関する研究においては、日本語教師の成長をアイデンティティの変容から捉える研究が多いことがわかった（ほかに内山，2019；加藤，2016；清水，2019；羽鳥，2009；古川ほか，2015；PHAM，2022など）。日本語教師のアイデンティティ研究は日本語教師の成長との関連性が深いといえる。

3. 4 教師の資質から捉える研究

4つ目は日本語教師の資質に関する研究であり、高木ほか（2007）、小林・若杉（2022）などがある。

高木ほか（2007）は、日本語教師に求められる能力を明らかにするために、マレーシアにおける日本語教師を対象とし、アンケート調査を通してマレーシアにおける日本語教師の能力とは何かということ明らかにした。その結果、日本語教師に関する資質の研究では、日本語教師が必要とされる能力を問うより、求められる能力を探るという方向に転換していく必要があるということ提言している。

また、小林・若杉（2022）は、日本語教師の専門性の視点から新人教師が仕事で感じる「面白さ」を解釈した。その結果、日本語教師の専門性について議論するのに、日本語教師の個人的要因から説明するだけでは不十分であるということ明らかにしている。

以上に挙げた研究から見ると、日本語教師の資質に関する研究では、主に教師の専門性、求められる能力について研究されているといえる。

3. 5 実践に関する研究

5つ目は、日本語教師の実践に関する研究であり、小林・上田（2021）、藤田・立部（2022）などがある。

小林・上田（2021）は、日本語教師と学校教員の相違点を明らかにするために、言語ヒストリーという研究手法を用いて研究を行った。その結果、言語面の違いを明らかにし、第二言語を教える教員は自身の異文化体験を学習者と有しているということがわかった。

また、藤田・立部（2022）は、日本語教師の発話の特徴を明らかにするために、「日本語教師発話コーパス」と「BTSJ日本語自然会話コーパス」を用いて量的研究を行い、普通の日本人母語話者同士の雑談と論文を指導するときの日本語教師の発話を比較した。その結果、初級レベルを教えている日本語教師では、中上級レベルより言語調整が多く行われていることなどが明らかになった。

以上に挙げた研究のように、日本語教師の実践に関する研究では、主に言語面に注目し、日本語教師の発話の特徴や言語ヒストリーなどから捉えられているといえる。

3. 6 ビリーフに関する研究

6つ目は、日本語教師のビリーフに関する研究であり、多くの研究が蓄積されているが、ビリーフを捉える視座が「観念」か「教師像」かで、大別されるものと思われる。

3. 6. 1 観念から捉える研究

「観念」から日本語教師のビリーフを捉えた研究では、主に日本語教師の観念（言語観、教育観、授業観、役割観など）が研究されている。

例えば、日本語教師の授業観についての研究には、代表的なものとして浅野和（2016）、鈴木ほか（2020）がある。

浅野和（2016）は、日本語教師にとって「学習意欲を高める授業」とは何かという課題を明らかにするために、キルギスにおける日本語教師を対象とし、調査を行った。

また、鈴木ほか（2020）は、自律を促す授業の中で、日本語教師に生じた気づきを探るために研究を行った。その結果、教師は必要な知識を認識し、同僚とのやりとりを重視しなければならないなどの気づきが明らかになった。

以上に挙げた研究では、日本語教師の授業に対しての考えや発想、授業での気づきを明らかにするというように、ビリーフを日本語教師の授業観から捉えているといえる（ほかに康ほか、2010；森脇ほか、2012；森脇ほか、2017；森脇ほか、2020；森脇ほか、2022など）。

言語観、教育観からビリーフを捉える研究には、代表的なものとして高井（2019）がある（ほかに葛；2014；武；2006；山田；2014など）。高井（2019）は、日本語教師には教育観への関心がまだ不十分であると指摘し、タイの日本語教育機関で働いている日本人日本語教師1名にライフストーリー・インタビューを実施して、被験者の教育観の変容および変容に影響する要因を探っている。

そのほか、平畑（2008）、福永（2015）などのように、日本語教師の役割観から日本語教師のビリーフを捉えている研究もある。

以上、「観念」から日本語教師のビリーフを捉えた研究では、言語観、教育観、授業観、役割観などの視点から研究されていることがわかり、日本語教師教育に関するさまざまな活動に対してどのような考えを持っているのかということを明らかにしていることがわかった。

3. 6. 2 教師像から捉える研究

教師像から日本語教師のビリーフを捉えた研究では、主に日本語教師が考える「いい日本語教師」とは何かということが明らかにされている。

例えば、小林ほか（2008）は、日本語教師が考える「優れた」日本語教師像を明らかにするために、50名の日本語教師を対象にアンケート調査を行い、日本語教師が考えるいい教師像を探っている。ほかに、日本語教師にとってのいい教師像を明らかにするために、多くの量的調査および質的調査が行われている（辛、2006；陈、2012；坪根ほか、2014；坪根ほ

か、2015；八田ほか、2018；古別府、2013；松田、2005など）。そのような研究は、日本語教師が考える「いい日本語教師像」を探っているといえる。

3. 7 本節のまとめ

本節では、日本語教師に関する先行研究を「教師研修、キャリア、アイデンティティ、資質、実践、ビリーフ」という6つの視座から概観した。ビリーフの研究がほかの視座と比べ、最も数が多く、捉えられる側面も多い。したがって、日本語教師のビリーフ研究は、日本語教師に関する研究の中で主流であるといえよう。

また、日本語教師研修に関する先行研究から見ると、日本語教師研修は特に日本語教師のビリーフに関連付けられている。岡崎・岡崎（1997）は、日本語教師の研修モデルは「トレーニング」から「成長」に変わり、「自己研修型教師」を養成する必要があると述べている。これによると、教師の育成では、自己研修を通して成長することが非常に重要だといえる。また、八田ほか（2012, p.23）は、「自己研修型の教師養成を目指す研修では、研修実施者が研修参加者である教師のビリーフを理解し、そのビリーフに対し適切な働きかけを行うこと、また研修参加者自身が自らのビリーフを知って、研修に参加することが重要だと考えられる」と述べている。つまり、自己研修型教師を養成するために、まず、教師のビリーフを理解しなければならないといえる。

しかし、ビリーフに関する研究には、問題点が残されている。日本語教師のビリーフを扱う多くの先行研究で岡崎（1999, p.147）の「言語学習の方法・効果などについて人々が自覚的あるいは無自覚的にもっている信念や確信」という定義が引用されているが、ビリーフを定義しないままの研究も多く見られる。また、ビリーフの変容を明らかにする研究があるが、変容の要因を探る研究がまだ少ないなどのような問題点が挙げられる。

次節では、日本語教師のビリーフに関する先行研究における問題点について述べる。

4. 日本語教師のビリーフに関する研究の問題点

本節では、日本語教師のビリーフに関する研究における問題点について提示し、今後の課題を述べる。

4. 1 定義の欠如

まず、ビリーフの定義をまとめ、自らの立場でビリーフを捉える研究がまだ少ないということである。ビリーフの定義について述べた研究では、岡崎（1999, p.147）の「言語学習の方法・効果などについて人々が自覚的あるいは無自覚的にもっている信念や確信」という定義が引用されることが多い（坪根ほか、2013；山田、2014など）。しかし、その定義以外に定義に基づいた日本語教師の具体的な行動などが挙げられておらず、分析する枠組みとしてはまだ不足していると考えられる。

一方、自らの立場でビリーフを捉えて行われた研究に山田（2014）、星（2017）などがあ

る。彼らの研究では、ビリーフに関する定義がまとめられ、ビリーフが自らの立場から捉えられている。

例えば、山田（2014）は、従来のビリーフに関する定義を示し、研究の視座として、以下のように述べている。

本研究は、教師の成長をビリーフの変化から考察し、変化の過程を検証することで教師の成長を可視化することを目的としている。そのため、万人にとって不変的である知識をビリーフに含めると変化を追うことができない。従って、本研究では、ビリーフとは、知識と異なる個人的に保持されている考えで、時間的変化を伴うものであるという立場を取る。

（山田，2014，p.8）

つまり、山田（2014）はビリーフを知識とし、その知識の時間的変容から、教師のビリーフを明らかにしている。

また、星（2017）は、従来のビリーフに関する理論をSCA（Socio-Cultural Approach）の視座からみたビリーフ、対話主義の視座からみたビリーフ、デューイ主義の視座からみたビリーフという3つの視座で整理し、日本語教師のビリーフの捉え方として、以下のように述べている。

つまり、日本語教師の実践はその社会的文化的文脈に埋め込まれたもので、その実践を、文脈の中にいる人同士のインターアクションだけでなく、文脈と、文脈の中に存在する人（「声」）とのインターアクションを含むものであるとみる。その実践のインターアクションの過程には、個人の経験から言語政策まで様々な「声」が存在する。そして、そのそれぞれの「声」には社会的歴史的視点とその意味や価値がふくまれており、話者の「声」以外の、他者の「声」も内包されている。そのような多声的な文脈での実践のインターアクションの過程を通して生じる動的なもの、自己のものとなったことば、自己の「声」として表れるものをビリーフと捉えることとする。

（星，2017，p.14）

つまり、星（2017）は、日本語教師のビリーフを社会的、文化的、歴史（政治）的な視点から捉え、言語政策から個人の経験までに生じた「声」を明らかにすることによってビリーフを探っている。

以上に述べた山田（2014）と星（2017）は、ビリーフをそれぞれ自らの立場での「知識」及び「声」として捉えている。

4. 2 授業分析の不足

山田 (2014) と星 (2017) が日本語教師のビリーフを定義し、それを幅広い面から捉えて研究したにもかかわらず、問題点は依然として残っていると考えられる。例えば、日本語教師の授業への参与観察が不足しているという点である。

山田 (2014) はインタビュー調査とアンケート調査を行ったが、日本語教育の実践現場に注目していなかった。一方、星 (2017) は、インタビューを用いて日本語教師に授業という実践現場の状況を聞いたが、これは、あくまでその教師自身が見た実践現場である。日本語を教授する実践現場は、学習者抜きでは成立しない。日本語教師の視点だけから研究するのは不十分であり、学習者の視点も重要であるといえる。

また、岡部 (2006) は、教師と学習者が授業内容についてやりとりしたEメールを分析し、授業の前後で教師と学習者の教師像に対する考え方がどのように変容したかを探った。その結果、教師と学習者双方とも授業が終わった後に、日本語教師の役割に対する考えが授業の前より多様化することがわかった。また、変容する要因として、岡部 (2006, p.77) は「教師が学生に一方的に影響を与えるのではなく、学生と教師がお互いに影響を与え合いながら、共に授業を作り上げていくことがわかった」と、教師と学習者間の相互作用を指摘している。

岡部 (2006) は学習者と教師、双方の視点から観念の変容を捉えているが、分析するデータはあくまでEメールの文章に留まり、授業中の教師と学習者のやりとりや、その時の教師と学習者の考えなどに焦点を当てていない。日本語教師が教えている実践現場そのものを分析し、教師のビリーフを学生とのやりとりから捉える必要があるのではないだろうか。しかし、従来の日本語教師のビリーフに関する研究には、教師と学生とのやりとりを中心として行った研究は管見の限り、まだ少ない。

また、研究対象として、日本人教師、タイ人教師、韓国人教師のビリーフに関する研究は多くある (坪根ほか, 2013; 坪根ほか; 2014; 坪根ほか, 2015; 星, 2017; 山田, 2014など) 一方で、中国人教師のビリーフに関する研究はまだ少ないといえる。今後、中国人日本語教師を対象とするビリーフ研究が必要であると予想される。

本節では、日本語教師のビリーフに関する先行研究を概観し、ビリーフを捉える視座を明らかにした。それらの研究の中に存在する問題点として、①日本語教師のビリーフの定義が曖昧あるいは不明である研究が多いこと、②「学習者とのやりとり」そのものに注目していないこと、③中国人日本語教師を対象とするビリーフ研究を行う必要があることという3点を提示した。

5. おわりに

本研究では、まず日本語教師を対象とする先行研究を概観し、従来の日本語教師に関する研究を「教師研修、キャリア、アイデンティティ、資質、実践、ビリーフ」という6つの視座から捉え、日本語教師のビリーフ研究は、日本語教師に関する研究の中でも主流であるこ

とを明らかにした。

また、日本語教師のビリーフに関する先行研究を概観し、ビリーフの捉え方によって観念、教師像という2つの視点から分け、それらの研究の中に残されている問題点について提示した。

加えて、日本語教師の視点から研究を行うだけでは不十分であり、学習者の視点も重要であることを明らかにした。さらに、日本語教師のビリーフの変容を明らかにするためには、日本語教師が教えている実践現場そのものを分析し、教師のビリーフを実践現場での学生とのやりとりから捉える必要があるが、そのような研究がまだ少ないという問題点を明らかにした。

最後に、研究対象の面から考察し、中国人日本語教師を対象とするビリーフ研究を行う必要があることも明らかになった。今後は、中国人日本語教師のビリーフの変容過程に注目し、実践現場で学生とのやりとりを中心とした研究が望まれる。

【参考文献】

- 浅野和グリザル (2016) 「日本語学習者と日本語教師の考える「学習意欲を高める授業」-授業参加者のインタビュー調査に基づいて-」『文化』1.2, 89-105.
- 飯野令子 (2012) 『日本語教師の成長の再概念化日本語教師のライフストーリー研究から』 [博士論文 早稲田大学], 1-221. <https://core.ac.uk/download/pdf/144455097.pdf>.
- 池田広子・酒井彩 (2019) 「日本語教師が教師研修に求めるものは何か-大学日本語教育センターと日本語学校の日本語教師の比較から」『九州大学留学生センター紀要』27, 13-20.
- 内山喜代成 (2019) 「成人の教室を担当する日本語教師の成長と教室デザインの変容-台湾民間教育機関のある中堅教師の語りから-」『言語文化教育研究』17, 234-254.
- 岡崎敏雄・岡崎暉 (1997) 『日本語教育の実習-理論と実践』アルク.
- 岡崎暉 (1999) 「学習者と教師の持つ言語学習についての確信」宮崎里司・J・V・ネウストブニー共編『日本語教育と日本語学習-学習ストラテジー論にむけて』くろしお出版.
- 岡部悦子 (2006) 「日本語教師養成課程における教師の「日本語教師観」が学生に与える影響-アクション、リサーチ報告(課題探求型AR)-」『長崎外大論議』10, 77-92.
- 奥田純子 (2011) 「日本語教師のキャリア形成-日本語教育機関の教師へのインタビューを手がかりに-」『異文化間教育』33, 60-80.
- 尾沼玄也・加藤林太郎 (2021) 「日本語教師のキャリア形成に関する一考察-現役教師の経験したやりがいと失敗から-」『拓殖大学日本語教育研究』6, 57-74.
- 葛茜 (2014) 「中国の大学日本語専攻教育における教師の言語教育観とその教育の再考-四大学の日本語教師への調査をもとに」『日本語、日本学研究/東京外国語大学国際日本センター』4, 53-70.
- 加藤鈴子 (2016) 「日本語教師として生きるということ:一人の女性日本語教師の葛藤から」『九州地区国立大学教育系、文系研究論文集』3, 13.
- 北出慶子・ラムザン優子・山本恭平・中園麻里子 (2013) 「海外日本語教育現場との接触を通じた教師のアイデンティティ成長-日本語教師の自己成長と教師育成プログラムの課題」『言語文化教育研究会2013年度研究集会大会「実践研究の新しい地平」予稿集』, 10-15.
- 康鳳麗・森脇健夫・坂本勝信 (2010) 「日本語教師の授業スタイル形成としての力量形成研究-ライフヒストリ

- 一的アプローチを用いて-」『鈴鹿医療科学大学紀要』17, 39-48.
- 国際交流基金 (2020) 国際交流基金ホームページ「中国2020年度調査結果」
<https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/area/country/2020/china.html#KEKKA> (2023年12月27日更新)
- 国際交流基金 (2021) 国際交流基金ホームページ「地域別の日本語教育状況」
https://www.jpf.go.jp/j/project/japanese/survey/result/dl/survey2021/east_asia.pdf (2023年12月27日更新)
- 小林明子・茅本百合子・縫部義憲 (2008) 「日本語教師が考える「優れた」日本語教師像に関する研究」『総合学術学会誌』7, 13-20.
- 小林浩明・上田和子 (2021) 「言語ヒストリーによる日本語教師へのアプローチ-ピア、レビューを手法として」『北九州市立大学国際論集』19, 1-13.
- 小林浩明・若杉美穂 (2022) 「初任期日本語教師の感じる「面白くなさ」と日本語教師の資質、能力-TAEリフレクションによる分析からの考察」『北九州市立大学国際論集』20, 1-11.
- 佐藤綾・高木裕子 (2009) 「日本語教育実習における異文化と関わる能力育成の可能性と育成に必要な要素の検討」『実践女子大学人間社会学部紀要』5, 169-188.
- 佐藤綾・片野洋平・木裕子 (2022) 「日本語教師のキャリア形成とその形成過程に影響する要因の分析」『国際教育交流研究』6, 13-28.
- 施京京 (2018) 『中国における日本語教育と日本人教師-変転する日中関係の狭間で-』 [博士論文 北海商科大学]
<http://hokuga.hgu.jp/dspace/bitstream/123456789/3492/2/博士論文%E3%80%80施京京.pdf>
- 清水順子・小林浩明 (2009) 「日本語教師をやめるに至ったのはなぜか-M-GTAによる分析」『北九州市立大学国際論集』7, 15-22.
- 清水順子 (2019) 「日本語学校における非常勤日本語教師の葛藤研究-TAEによる考察-」『北九州市立大学国際論集』17, 59-72.
- 篠崎摂子 (2019) 「中国大学日本語教師研修の25年間を振り返る-中国の大学日本語教師を取り巻く状況の変化-」『国際交流基金紀要』15, 55-66.
- 辛銀真 (2006) 「日本国内の非母語話者日本語教師に対する学習者のピリーフの変容-早稲田の初級実践を通して-」『講座日本語教育』42, 60-81.
- 鈴木理子・白頭宏美・杉原由美 (2020) 「自律を促す授業における日本語教師の気づきとその契機-自律型クラスを初めて担当した教師Aの事例から-」『教師学研究』23 (1), 11-20.
- 高井かおり (2019) 「タイの中等教育機関で働いていた斎藤先生の日本語教育観は変容したのか-気づきを得ることの難しさ」『言語文化研究』17, 300-316.
- 高木裕子・佐藤綾・古内綾子 (2007) 「「日本国内」「海外」との比較に見るマレーシアにおける日本語教師が必要とする実践能力」『実践女子大学人間社会学部紀要』3, 43-67.
- 武一美 (2006) 「日本語教師の言語教育観とその意識化-大学院生を対象とした縦断的事例研究から-」『早稲田大学日本語教育研究』9, 65-76.
- 陈良慶 (2012) 「教育実習を通じて見えてきた非母語話者日本語教師の利点」国際教養大学『国際教養大学専門職大学院グローバル、コミュニケーション実践研究科日本語教育実践領域実習報告論文集』, 206-230.
- 坪根由香里・小澤伊久美・八田直美 (2013) 「韓国人経験日本語教師のピリーフを探る-「いい日本語教師」に関するPAC分析の結果から-」『大阪観光大学紀要』14, 67-78.
- 坪根由香里・小澤伊久美・巖肩志江 (2014) 「中国人経験日本語教師の『対学習者』ピリーフとその背景を探る-「いい日本語教師」に関するPAC分析の結果から-」『大阪観光大学紀要』14, 59-67.
- 坪根由香里・巖肩志江・小澤伊久美・八田直美 (2015) 「いい日本語教師」に関する中国人新人教師のピリーフ-PAC分析の結果から-」『大阪観光大学紀要』15, 33-42.

- 中西久実子・井本麻美（2021）「非日本語母語話者が日本語教師になるための支援の必要性--2020年度オンライン講座「使える日本語を教えてください！」での調査をもとに--」『無差』28, 13-36.
- 八田直美・小澤伊久美・嶽肩志江・坪根由香里（2012）「ノンネイティブ新人日本語教師にとっての研修の意義 -PAC分析によるタイ人新人日本語教師のビリーフ調査から-」『国際交流基金日本語教育紀要』8, 23-39.
- 八田直美・坪根由香里・小澤伊久美・内田陽子（2018）「縦断的質問紙調査から見るタイ人日本語教師Aのビリーフ」『大阪観光大学紀要』18, 1-9.
- 羽鳥（江頭）玲子（2009）「複合アイデンティティと日本語教育研究」『WEB版リテラシーズ』6, 21-26.
- 平畑奈美（2008）「アジアにおける母語話者日本語教師の新たな役割 -母語話者性と日本人性の視点から-」『世界の日本語教育』18, 1-19.
- 深澤のぞみ・NGUYEN THU HUONG・王凱・Pawin Jarnlee（2022）「海外で教える日本語教師を対象としたオンライン研修のニーズについて」『金沢大学国際機構紀要』4, 93-107.
- 福永達士（2015）「タイ人日本語教師の教師認知-タイ中等教育機関におけるビリーフ調査から-」『日本語教育紀要』12, 27-36.
- 藤田裕一郎・立部文崇（2022）「日本語教師発話の分析 -初級と中、上級レベル授業、そして母語話者同士の会話を比較して-」『朝日大学留学生別科紀要』19, 33-43.
- 古川嘉子・木谷直之・布尾勝一郎（2015）「インドネシアの高校、大学日本語教師への質問紙調査に見る日本語学習の意味づけの変化」『国際交流基金日本語教育紀要』11, 7-19.
- 古別府ひづる（2013）「タイ高等教育機関におけるタイ人日本語教師の良き日本語教師観 -PAC分析と半構造化面接より-」『大学日本語教員養成課程研究協議会論集』8, 25-31.
- 星摩美（2017）『日本語教師のビリーフ研究』[博士論文 金沢大学]
<https://kanazawa-u.repo.nii.ac.jp/records/35528>.
- 松田真希子（2005）「現職日本語教師のビリーフに関する質的研究」長岡技術大学『長岡技術大学言語、人文科学論集』19, 215-240.
- 森脇健夫・康鳳麗・坂本勝信（2012）「熟練日本語教師の力量内容とその形成 -ライフヒストリー的アプローチによる日本語教師の授業スタイルの形成研究-」『三重大学教育学部研究紀要』63, 267-273.
- 森脇健夫・康鳳麗・坂本勝信（2017）「教師の「熟練性」の研究 -2人の中堅中国人日本語教師の授業の比較分析を通して-」『三重大学教育学部研究紀要』68, 355-367.
- 森脇健夫・康鳳麗・坂本勝信（2020）「初任期から中堅期にかけての日本語教師の授業スタイルの形成 -2名の中国人日本語教師14年間の足跡を追って-」『三重大学教育学部研究紀要』27, 23-31.
- 森脇健夫・康鳳麗・坂本勝信・小西知代・胡君平（2022）「ストップモーション&ライフヒストリーインタビューによる授業研究 -中国人日本語教師の授業形成史研究-」『三重大学教育学部研究紀要』73, 537-551.
- 山田智久（2014）『教師の成長におけるビリーフの変化』[博士論文 北海道大学]
https://eprints.lib.hokudai.ac.jp/dspace/bitstream/2115/58133/1/Tomohisa_Yamada.pdf.
- 若杉美穂（2019）「日本語教師のキャリア形成における大学院進学の意味づけ」『日本語日本文学論議』14, 62-49.
- PHAM HOANG ANH（2022）「オンライン日本語教育で教師が直面している困難 -PAC分析を用いたオンライン形式別にみられる教師の困難点-」『一橋大学国際交流センター紀要』4, 93-102.
- 中国教育考试网（2023）「笔试大纲」 <https://ntce.neea.edu.cn/html1/category/1507/1099-1.htm>. (2023年12月27日更新)

（しゅう てんしょう：城西国際大学大学院人文科学研究科比較文化専攻博士後期課程在籍）

An Issue of Research on Beliefs of Japanese Language Teachers: To Improve Japanese Language Education in China

Zhou Tianshu

Due to the current situation that emphasizes the need to enhance the expertise of teachers in Japanese language education in China, there is a necessity to cultivate “self-developing teachers” as proposed by Okazaki and Okazaki(1997). To achieve this goal of nurturing such teachers, it is essential to understand their beliefs. Therefore, the present study aims to provide an overview of research on the beliefs of Japanese language teachers and to discuss the issues and future trends in this regard. As a result, the research on Japanese language teachers can be viewed from six perspectives, with the study of beliefs being the most numerous and encompassing the most aspects compared to other perspectives. Among the issues existing in research on the beliefs of Japanese language teachers, three points have been identified: 1) Many studies have unclear or undefined definitions of Japanese language teachers’ beliefs. 2) Some studies have defined beliefs but have not focused on the interaction with learners themselves. 3) There is a limited amount of research targeting Chinese Japanese language teachers.